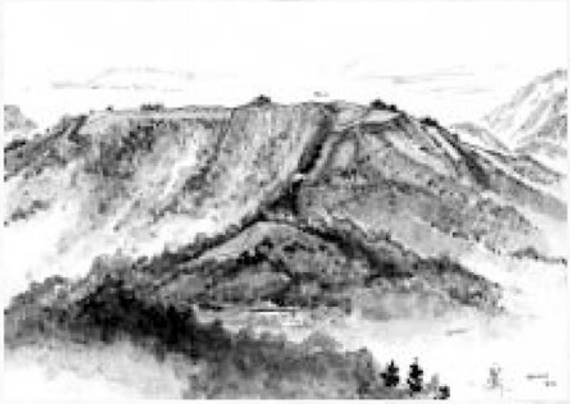
ふるさとの誇り④

歴史にふれる遊歩道 中野城址


中野城復元図（絵：宮坂 武男）

県道伊奈ケ湖線を上っていくと南側に見える城山（1020m）の山頂付近一帯が、古代の城郭「中野城」であったといわれています。

中野城は、江戸時代に編さんされた山梨を代表する地誌『甲斐国志』において、「中野ノ城跡 中野村 遥ニ西山ノ中腹ニ懸リ東面垂崖数十丈 名ケテ大缺ト云フ 中野村・秋山村ハ山足三四十町ニ在リ 川上・湯沢・塚原等ノ入会場ナリ 伝ヘ云フ新羅五郎種久ナル者ノ築ク所也 乃チ秋山太郎光朝要害ノ城墟ナリ 塁三重ニシテ二ノ郭・三ノ郭巍然タリ 南ハ山勢陵夷ニシテ郭基広ク曲城（クヒチガヒ）等アリ 平林村ノ岩径ニ城ノ橋ト云フ処ノ上ニ当リ嶮岨ナリ 東南ヘ一級下リ馬冷場ト云フ処三面ニ塁ヲ設ク 北ハ山峻ニシテ郭狭シ 塁中涓滴ノ水ナシ北ノ方地獄谷ノ渓流ヲ桔槔（ハネツルベ）ニテ汲ミ揚ゲタリトモ西ノ方儀丹ガ瀑ノ水ヲ埋樋ニテ取リシトモ云フ」との記述があり、秋山太郎光朝の要害であったことが伝えられています。

秋山太郎光朝は、甲斐源氏の一流、加賀美遠光の長男として生まれ、現在の南アルプス市秋山に拠ったとされており、現在の秋山の熊野神社は光朝の居館跡と伝えられています。当地からは県指定文化財である「秋山太郎光朝供養の経筒及び附属品」が発見されているほか、父である遠光、光朝、および同夫人の墓とされる五輪塔も残されています。

秋山光朝公木像（光昌寺）

新羅三郎義光を祖とし、甲斐国一円に勢力をもった甲斐源氏は、治承4年（1180年）の源頼朝の挙兵に呼応し、鎌倉幕府創立を目指す源氏勢力の一翼を担いました。しかし、幕府成立後は一転、甲斐源氏の強大な軍事力を恐れる頼朝は、武田信義、安田義定をはじめとする主要な甲斐源氏を次々と謀殺・排除していきます。このような中、平重盛の娘を娶るなど平家と深い関係があった光朝もまた、頼朝から排斥され、鎌倉勢に責められ、ついには文治元年（1185年）秋、追い詰められた「雨鳴城」で自害したと云われています。

城山の南東下方に位置する雨鳴山山頂にも山城の跡があり、そこを光朝の自害した雨鳴城とする説がありますが、地域には中野城址であるこの城山が、光朝自害の地であるとの伝承があることや、城山を雨鳴城と呼ぶ場合もあり中野城と雨鳴山の遺構が同一視されていること、さらには『甲斐国志』に「東南ヘ一級下リ馬冷場ト云フ処三面ニ塁ヲ設ク」と記載される施設が、その位置、造りからみて雨鳴山の遺構は中野城の一部（支城）であるとする説もあります。

中野城が占地している城山山頂部は南北に伸びる細長い尾根状を呈し、特にその東側は急峻な崖となっており人の侵入を阻みます。しかし、この山頂部分には東面の急峻な崩落地形からは想像できない程の平坦地が各所にあります。

山頂の三角点付近には、現在も高さ50cm程の低い土塁が認められ、この土塁が尾根の山道と交わるところに虎口が設けられています。この土塁の内側は、帯状の平坦地となっているほか、山頂域の北側にも比較的広い平坦面があり、有事の逃げこみ場として充分機能したことがうかがえます。

秋山光朝館跡（秋山熊野神社）

（伝）加賀美遠光および秋山光朝・同夫人の墓